

平成 30 年 1 月 19 日

島根県立津和野高等学校

廣田 理史

2017 年度松下幸之助記念財団教員フェローシップに参加させていただいて

本校周辺には平成 22 年～25 年に水質日本一になった高津川があり、高津川の源流域には安蔵寺山などのブナ・ミズナラの原生林がある。さらに、豊かな森の恵みは日本海までおよび、高津川の河口域には豊かさを表す生物の 1 つであるチョウセンハマグリが生息している。このような豊かな自然があるにも関わらず、入学してくる生徒の状況として、幼少から野外で遊んだ経験の少ない者が多い。そのため、身近な海や川にどんな生物が生息しているか知らない上に、身近な環境を保全する意識も非常に低くなっている。実際に、周辺の小川に見られるメダカやドジョウ、里山に生息するカブトムシやクワガタを採った経験のない者が多く、川で泳いだ経験のない者すら目立つようになってきている。豊かな自然があることが当たり前になっており、現在の環境を保全する必要性まで考えることができている生徒は一握りである。このような傾向は、周辺の住民にも見られ、高津川流域の文化の一つであるアユ漁をはじめとした川での漁をする者は年々減少している。残念ながら、天然のアユ、ニホンウナギ、モクズガニなどダムがあると生息できない生物が、生息していることが当たり前になっている。これらの生物が生息している背景にどれだけの豊かさがあるか、感じるができなくなっている。

そこで生物および生物基礎に含まれている単元の 1 つである生態系の中で、周囲の環境に目を向けさせる機会を設けている。実施した内容として、水生昆虫の採集を通しての水質調査、用水路における工事の状況確認（工事方法により生息する生物に大きな変化がみられる）、森里海連環学を取り入れた学びなどを行った。

その際、この度参加させていただいたアースウォッチジャパンの活動で感じたことや写真等を授業の中で使わせていただいた。豊かな海があるためには豊かな森と里があること、そこに健全な水の循環があることが重要である。そして、本来森の恵みは河川だけでなく地下水を通して海に提供されている。しかし、気仙沼周辺の防潮堤の状況は、河川と海のつながりを断つだけでなく、地下水を通してのつながりも断っている可能性があることを写真を使いながら説明した。そして今後、防潮堤がすべて完成した際にどんな変化が起こるか生徒にシュミレーションさせた。残念なのは、写真ではあの威圧感や大きさが伝えることができなかった点である。また、舞根湾の津波後の変化を、攪乱の例として使った。津波直後にカキが豊漁になったのはなぜか、津波によって環境にどのような変化（干潟がつくられたこと、ニホンウナギが見られるようになったことなど）がもたらされたかなど、授業の中に盛り込む例としては非常に良いものであった。

本校では、平成 28 年度から森里海連環学を取り入れており、今年度は淡水の流れ込んで
いる砂浜でヒラメの稚魚を採集した。この採集から分かった周辺の海洋環境と気仙沼周辺
の状況を比較して説明することも行った。全国各地で起こっている環境問題は教科書等
にも掲載されているが、体験を通しての話は聴くことができない。やはり、実体験を通し
ての話ができたことは、生徒の内面に訴えることができたように感じた。環境問題に関し
ては、周囲への心配りによって改善に向かう可能性が高いものが多いように感じる。その点
から考えても経験を通しての授業を行い、心を育てることは重要である。

この度の研修に参加して、今後我々が何を考える必要があるか切実に感じさせられた。
生物の生息環境保全、持続可能性、予算の面など・・・我々は、自然の力を人間の力で押
さえつけることはできないということを改めて考える必要がある。そして、舞根湾周辺の
住民の方がされたように、自然との共存という考え方をもっと教育に取り入れていくこと
が、我々教員にとって重要な使命の一つである。自然と共存する心を育み、自然と人の両
者の立場でものを考え行動できる人材を育成し、後世に本当の豊かさを残していきたい。

